

## 【各研究チームの報告】

アセスメントについての研究チームの報告

## V アセスメントについての研究

研究の重点のところ、**「研究を進めていく上でアセスメントは必須である。しかし、アセスメントは取組の評価ではない。現状を分析し、適切な対応、改善につなげていくためのものであるとした。」**と述べている。この言葉通り、全ての取組に対してこのアセスメントの視点をもちつつ、その取組に当たることが重要と考える。

本研究では、充実した授業、特別活動等の取組に対して、どのようなアセスメントを行い、それがどのように生かせるかという提案をしていく。

### 1 研究の重点について

アセスメントチームでは、前述の通り、右の2点に重点を置いて研究を進めた。

- 授業の母体となる学級集団のアセスメント
- 実践した指導モデルのアセスメント

「授業の母体となる学級集団のアセスメント」については、主にhyper-Q U検査をもとに行っている。されど、hyper-Q U検査については、どのような形で分析がなされているかのメカニズムはブラックボックスである。私たちは、送付されてきた結果や結果に対する助言に着目し、今後の指導の参考にしていく活用方法が一般的である。

それをどのように活用し、学級集団のアセスメント（本校は「マクロ的アセスメント」と定義付けた。）をしたのかについて述べる。

加えて、開発をした「実践した指導モデルのアセスメント実用化ツール」である「©"Online awareness Survey of Analog " Method - UTILITY」を含めた、焦点を絞ったアセスメント（本校は「ミクロ的アセスメント」と定義付けた。）についてその具体を述べる。そして教科と特別活動で実践した指導モデルにおいて、どのようにミクロ的アセスメントを行い、どのようにこれらのアセスメントを活用したかについて述べることにする。

### 2 授業の母体となる学級集団のアセスメント（マクロ的アセスメント）

#### （1）的確な教科指導・学級指導のためのアセスメント

的確な教科指導・学級指導を展開するには、その集団や所属する一人一人の生徒を把握する必要がある。そこで活用したのがhyper-Q Uである。

#### hyper-Q U実施の目的

生徒の心理面、行動面の理解を深め、現状の学級集団の状態を適切に把握し、計画的な指導と援助を積極的に行うことで、問題行動の未然防止や、意欲的な言動の喚起・促進に役立てる。

#### （1）問題行動の未然防止

いじめの発見・予防、不登校や学級崩壊の予防、各種生徒指導上の問題の予防など。

#### （2）意欲的な言動の喚起・促進

既に持っている力の更なる伸長、新たなことに挑む意欲の育成、チームワークの醸成、適応感の高揚など。

★早期発見・早期対応

★生徒をよりよい方向へ導く上で参考になる。

「宝の持ち腐れ」を防ぐ。

## hyper-Q Uの結果から把握・検討できること

### (1) 集団がわかる

- ① 自律できていない学級
- ② 互いにサポートしあえない、高めあえない学級
- ③ 教師にメッセージを投げかけている学級等の把握と支援が可能。

### (2) 個人がわかる

- ① 不登校になるおそれのある生徒
- ② 嫌な思いをしている生徒
- ③ 能力を発揮しきれない生徒等の把握と支援が可能。

### (3) 個人と集団の関係性がわかる

**学級に対しての満足度や自分（その生徒の）の立ち位置を客観的に見取ることができる。**

※hyper-Q U調査はQ-U調査にソーシャルスキル尺度を加味した調査ですが、本研究ではQ-U調査の部分に着目。

◇Q-Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド 中学校編

河村茂雄・小野寺正己・粕谷貴志・武蔵由佳 企画・編集（2004 図書文化）

◇学級づくりのためのQ-U入門 河村茂雄（2006 図書文化）

より引用

hyper-Q Uにて学級のアセスメントを行うことで、学級全体の状況を客観的に見取ることができる。しかし、学級の様子は時期や場面で刻々と変容し、検査をしたときと状況が大きく変わる場合もある。ならば、学級活動の節目や普段の授業においても、hyper-Q Uに準ずるアセスメントにて見取することは必要ではないだろうかと考える。

hyper-Q Uを含めたこれらの見取りは、学級活動や授業で学級全体に及ぼす影響を事前に予見することができる。そして、これらのアセスメントにより、その時の個人の状況がわかり、教師の仕掛けにも活用することができる。

### 3 アセスメントの視点の理解（マクロ的アセスメントとミクロ的アセスメント）

本研究では、アセスメントについて次の2点に重点を置いて研究を行った。

1点目は「マクロ的視点とミクロ的視点でのアセスメント」について、2点目はミクロ的アセスメントの柱である「項目（観点）のクロス分析」である。

#### (1) マクロ的視点とミクロ的視点でのアセスメント

今までの「単なる経験をもとにした集団把握」であったものを、hyper-Q U調査を活用した客観性をもった「マクロ的なアセスメント資料」を基に集団把握をすることにした。ここで留意したことは、多くの教師にとっては分析のメカニズムがブラックボックスであるhyper-Q U調査を、単に結果だけを引用するのではなく、それを基に教師集団の経験や日々の見取りを加味したアセスメントをするという点である。

これにより、複数の目で多面的多角的に集団の状況を共有することができる。これが本校のマクロ的アセスメントである。

ここで留意したい点は、hyper-Q U調査を活用した客観性をもった「マクロ的なアセスメント資料」を基にした集団把握を定期的に行うという点である。

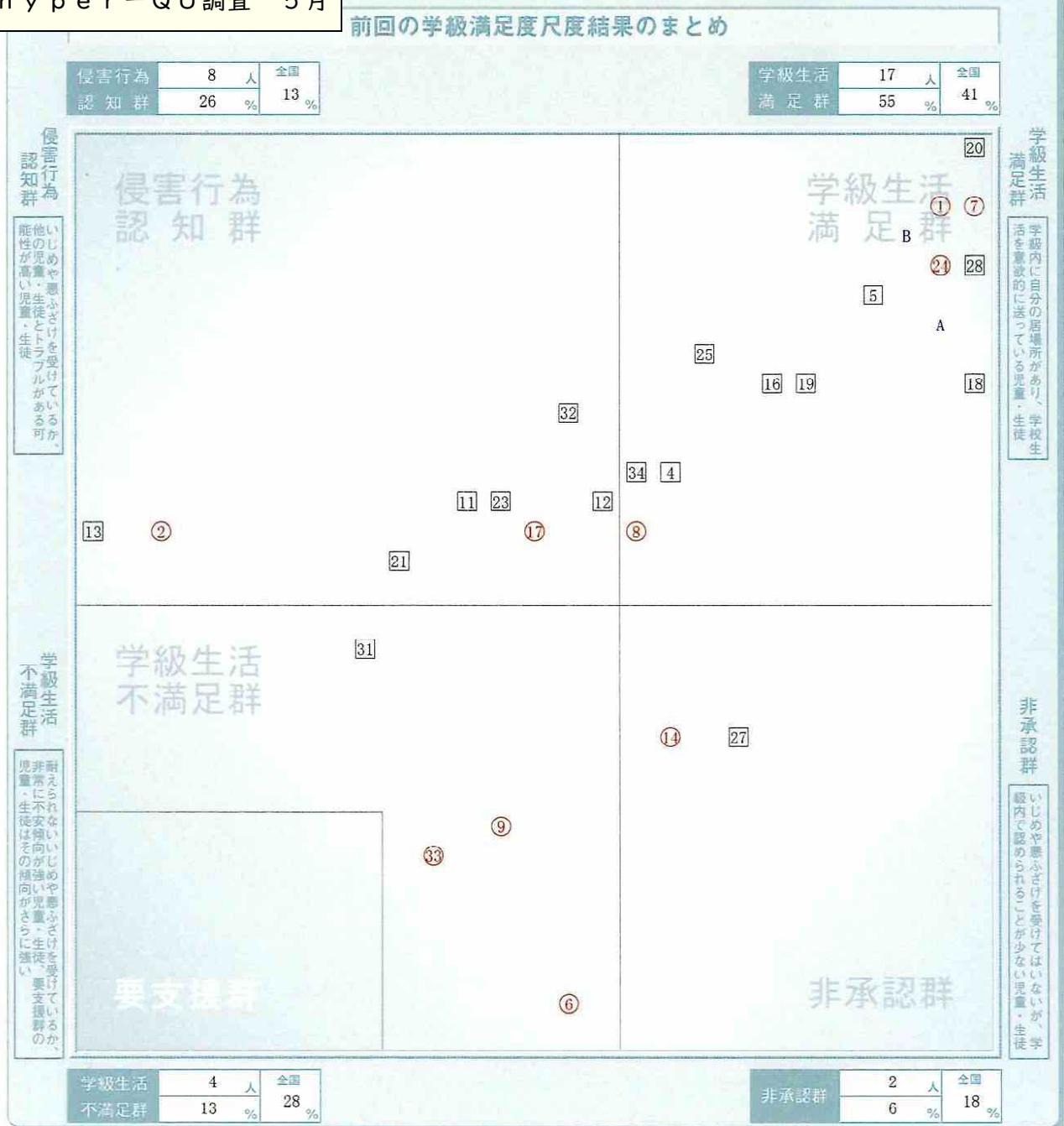
本校では、年度始めの学級開きが一段落し、上半期の教科指導や学校行事が始まる直前に第1回のhyper-Q U調査を行い、学年会等で集団把握を行った。そして、下半期の学校行事が始まる直前に第2回の集団把握を行った。

【実際のマクロ的アセスメント】

これは、令和6年5月に実施した本校のX組のhyper-Q U調査の結果の一部である。

(この表の具体的な説明は、前ページに記載してある資料等を参照)

hyper-Q U調査 5月

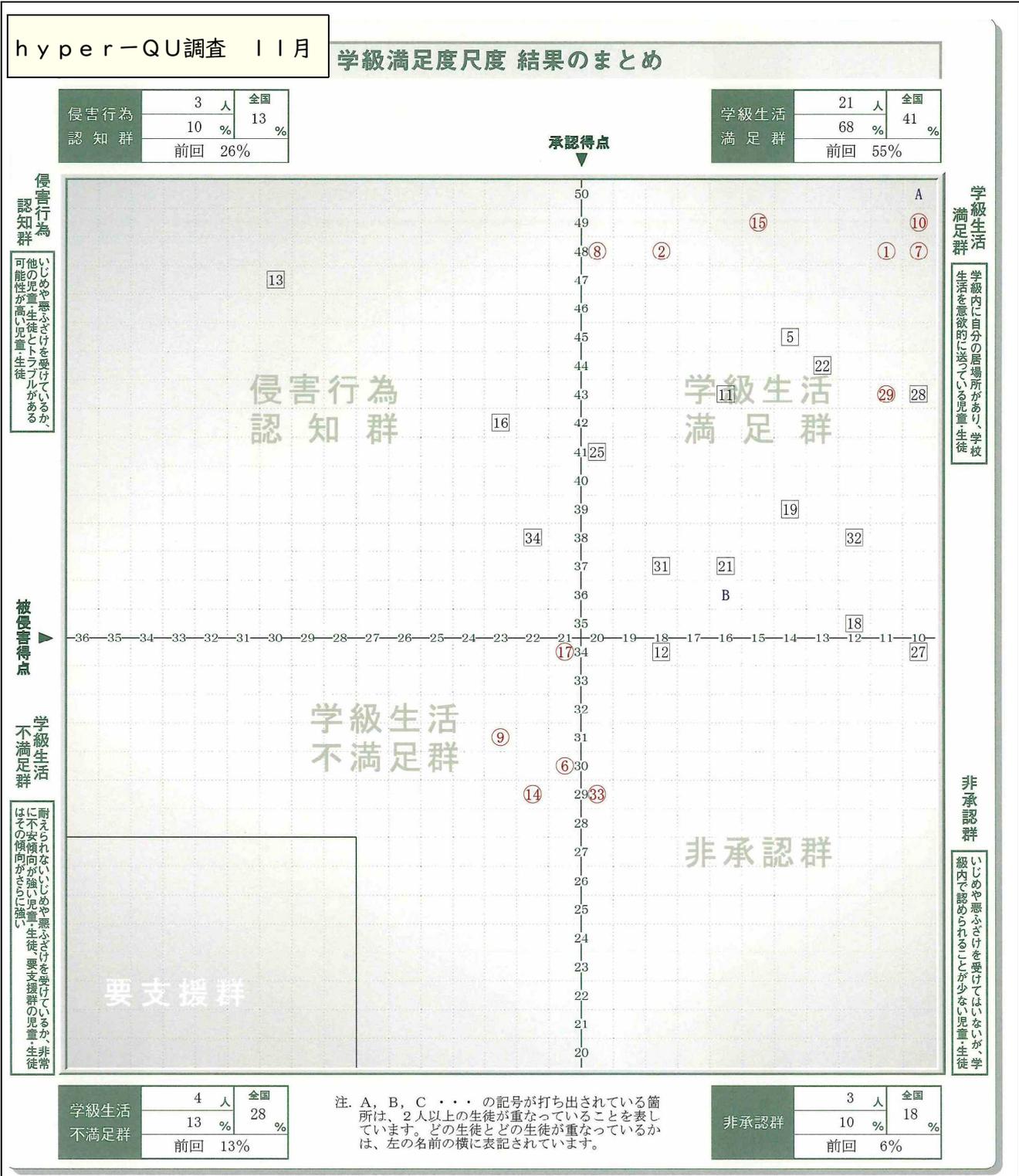


hyper-Q U調査は、この表だけではなく、様々な観点による調査結果、結果に基づいた学級の現状分析、そして助言がなされる。その記述を学級担任が読むだけではなく、教師集団の経験や日々の見取りを加味したアセスメントをすることが大切である。

「学級生活満足群」「侵害行為認知群」「非承認群」「学級生活不満足群」の各領域の生徒を思い浮かべ、調査日直近のその生徒の様子や学級内で起こっている課題が影響していないか、など少なくともその学級に関わっている学年の教員の複数の視点でアセスメントすることが求められる。その視点がなければ、「あー、こういう学級ね。」で終わってしまう。

これを機会に、教師として何ができるか、何をしなくてはいけないかをチームで議論し、個に応じた生徒への仕掛けや意図的計画的な学級指導の手だてを見付けなければならない。

さて、このX組が下半期にどのように変化したかを参考までに先に示しておく。



「学級生活満足群」「侵害行為認知群」「非承認群」「学級生活不満足群」の領域に属する生徒の割合だけに注目が行きがちになるが、上半期からの個に応じた対応や仕掛け、学級全体に対して講じてきた手だてを検証し、なぜこのような結果になったのかを、やはりチームで検証することが大切である。その検証は、より良い学級活動だけではなく各教科のより良い授業改善にも役に立つものになる。また、上半期と下半期を比較して、変化があまりないものであったり、講じた手だての割には、課題が残りすぎている場合がある。これを「手だてを見直す良い機会」と捉えたり、「集団がまだ成熟する手前」などの分析ができる場合もある。

結果に一喜一憂するのが目的ではなく、マクロ的アセスメントのための資料と考えたい。





本校ではこのような観点による調査を行い、クロス分析を行った。

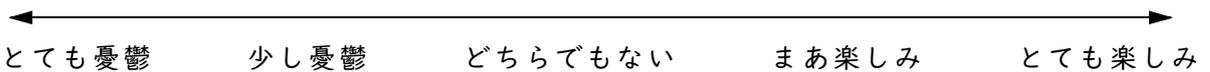
一面的にアセスメントをするだけでなく、調査の項目をクロス分析させることで、多面的なアセスメントにつなげることができる。

今回の研究での特筆すべき点は、各校に導入されたタブレット端末を活用するとともに、派遣されているICT支援員のスキルやそのネットワークを活用し、このクロス分析を数値だけではなく、「学級内の個々の生徒の状況を座標化した」ことである。このことにより、学級全体の様子を視覚的に捉えることができた。

【実際のミクロ的アセスメント】

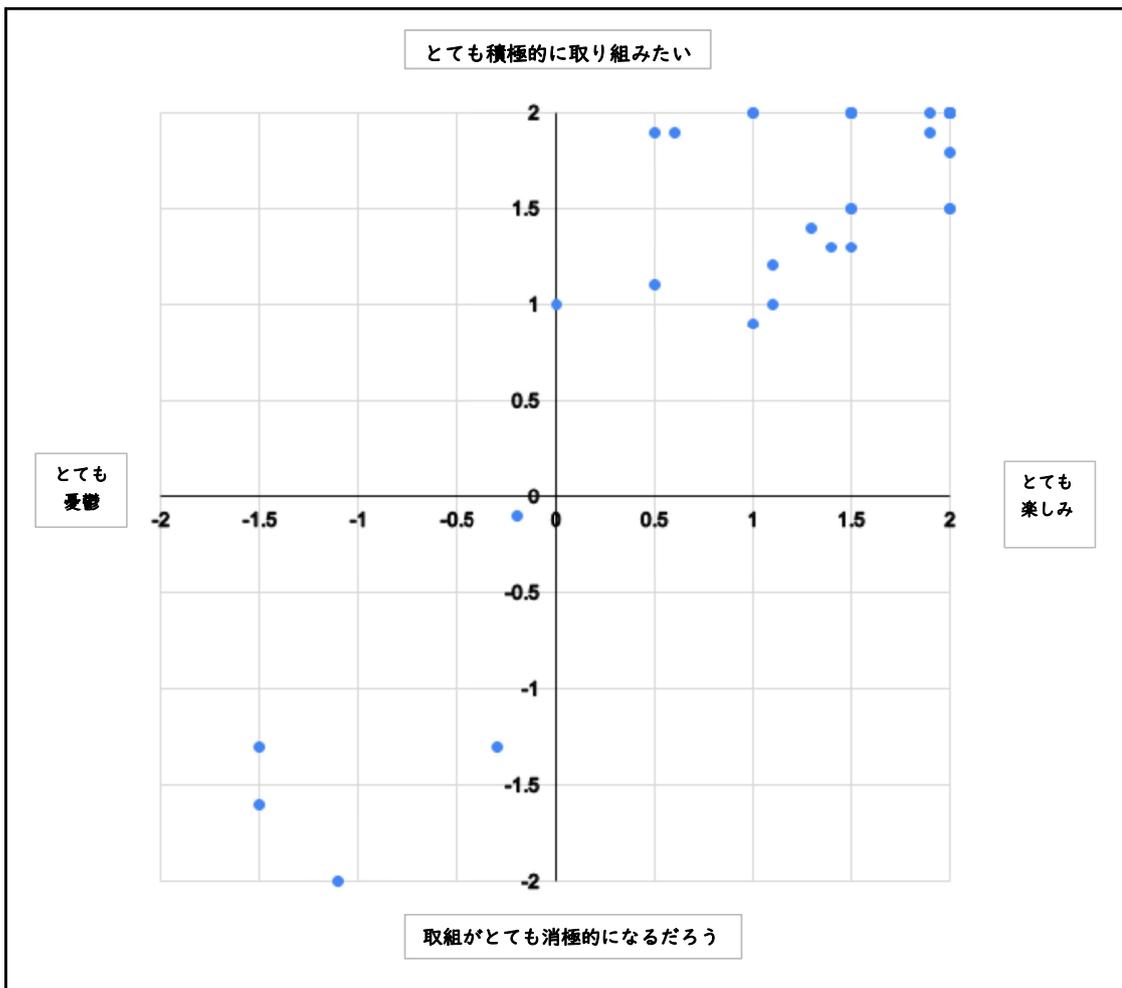
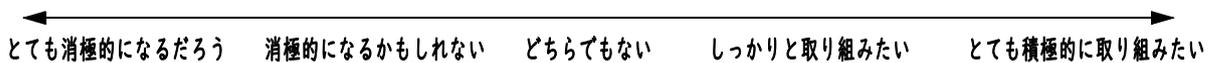
◆ X組の合唱コンクール事前調査（セルフアセスメント）より

項目1：合唱コンクールを前にして、今の気持ちの状況はどうか？



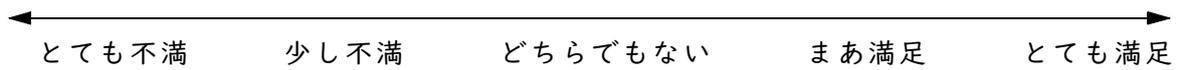
項目2：合唱コンクールに向けての学級の実践に対するあなたの実践は、

どのような姿になると思いますか。



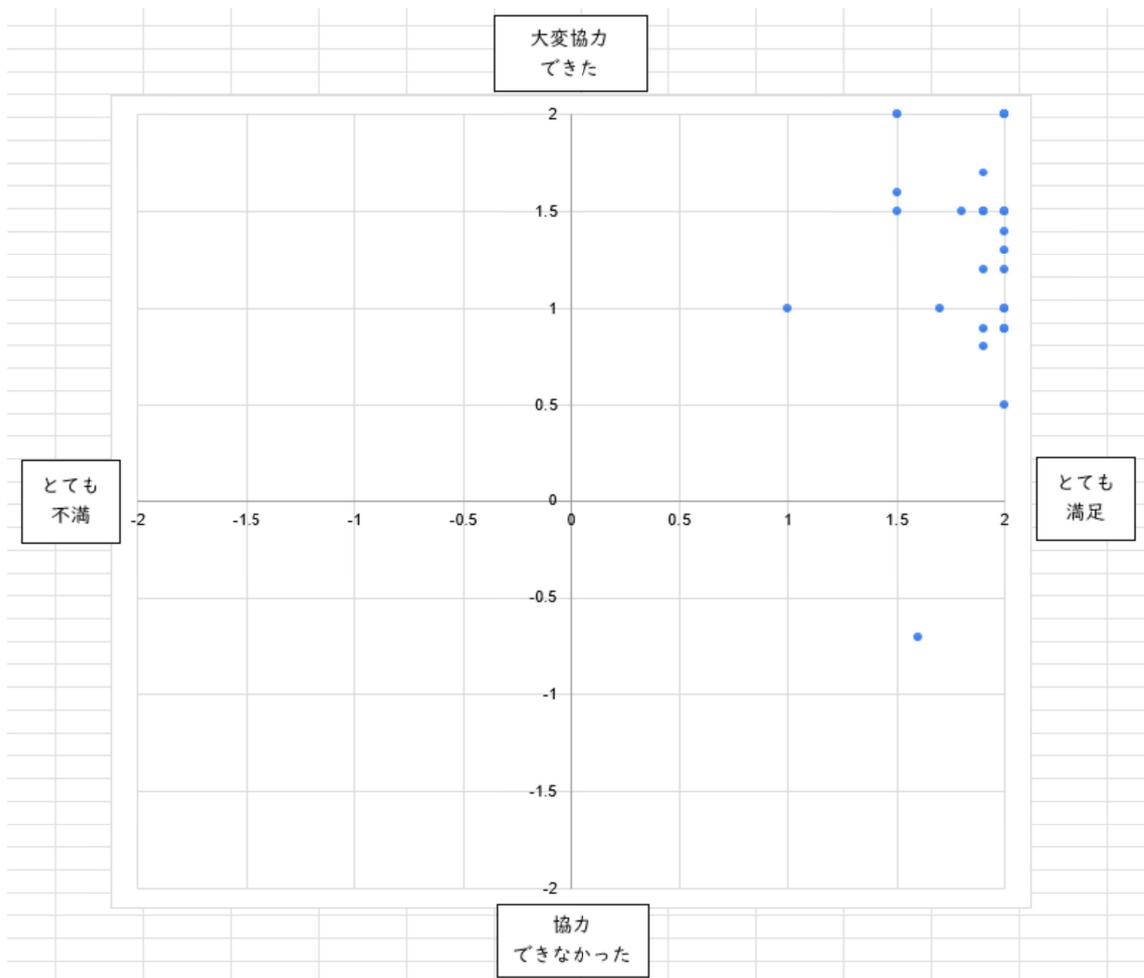
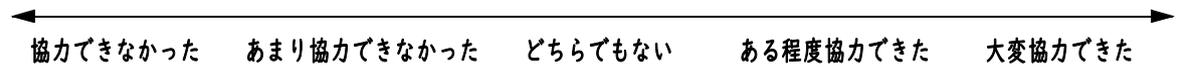
◆ X組の合唱コンクール事後調査（セルフアセスメント）より

項目1：合唱コンクールを終えて、今の気持ちの状況はどうか？



項目2：合唱コンクールに向けての学級の実践に対して、

あなたは、どのくらい協力できましたか。

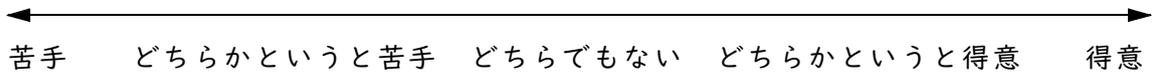


このように、調査の項目（観点）については教科と特別活動では異なる。特別活動においては、学校全体や学年全体で同じ項目（観点）となることが多いが、教科では、単元や内容で、見取りたい内容が異なってくるはずである。これは当然なことである。大事な点は、なぜその項目なのか、その項目をどのように生かすのかということ踏まえての調査とすることである。前年度にアンケートをとっているから、今年度もアンケートという考えは意味をもたない。経年比較に活用する等の狙いをもって調査は行うべきである。とすれば、このような視覚的な資料はとても比較しやすい資料と考える。

- ◆ある教科の指導前調査と指導後調査（セルフアセスメント）より次に、教科におけるセルフアセスメントの事例を報告する。紹介をする事例では、新しい単元に入る直前に、2つの項目で調査をした。

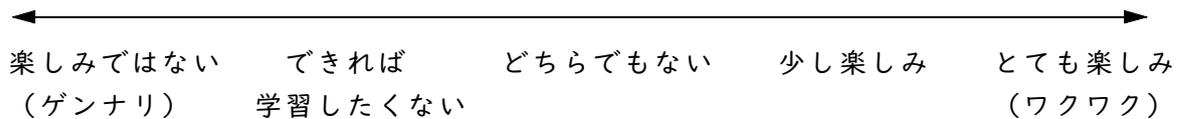
項目1：苦手・得意調査

これから入る単元は、苦手ですか？それとも得意ですか？

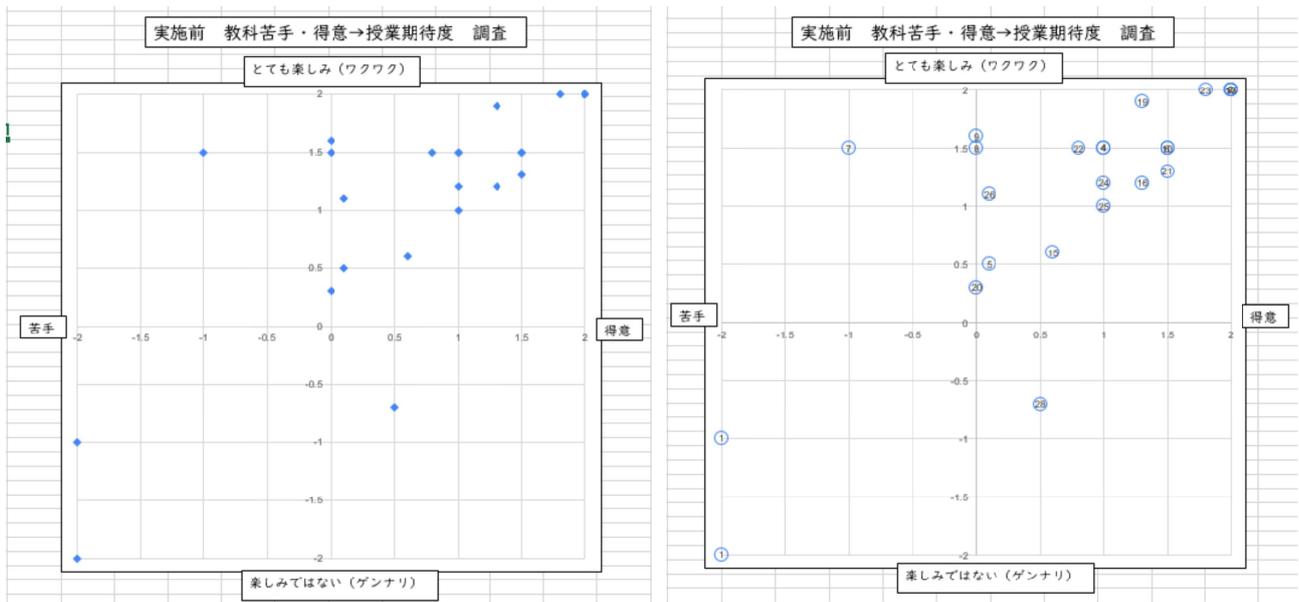


項目2：期待度の調査

これから入る単元の学習に対してのあなたの期待度はどうですか？



調査項目は、教科の特性に応じて教科担当がその調査内容を考えるべきであるが、本校の研究では2つの視点でこのアセスメントを活用している。まず、左図は、受けもつ指導学級全体の状況を把握するには適した図である。生徒の得意・苦手の状況とこれからの授業にどれほどの気持ちで向き合おうとしているか、そしてその相関はどのようなのかということが分析できる。



右図は各点に生徒の番号を入れたものである。この図により、個々の生徒の状況を把握することができる。例えば右図左上の7番の生徒は「苦手ではあるが、授業を楽しみにしている」生徒である。この生徒への仕掛けはとても重要なものとなる。この生徒のこの教科への苦手意識が学級全体に周知されている場合であれば、工夫次第では「7番の生徒でも意欲的に取り組めるんだ」というような雰囲気を作り出され、学級全体が前向きな方向に動き出す可能性も十分にある。このような状況の事前把握がなされなかったら、「適切な仕掛け」はできないのではなかろうか。

そして、単元の指導が終わった直後に次の調査を行った。

<取組後に実施>

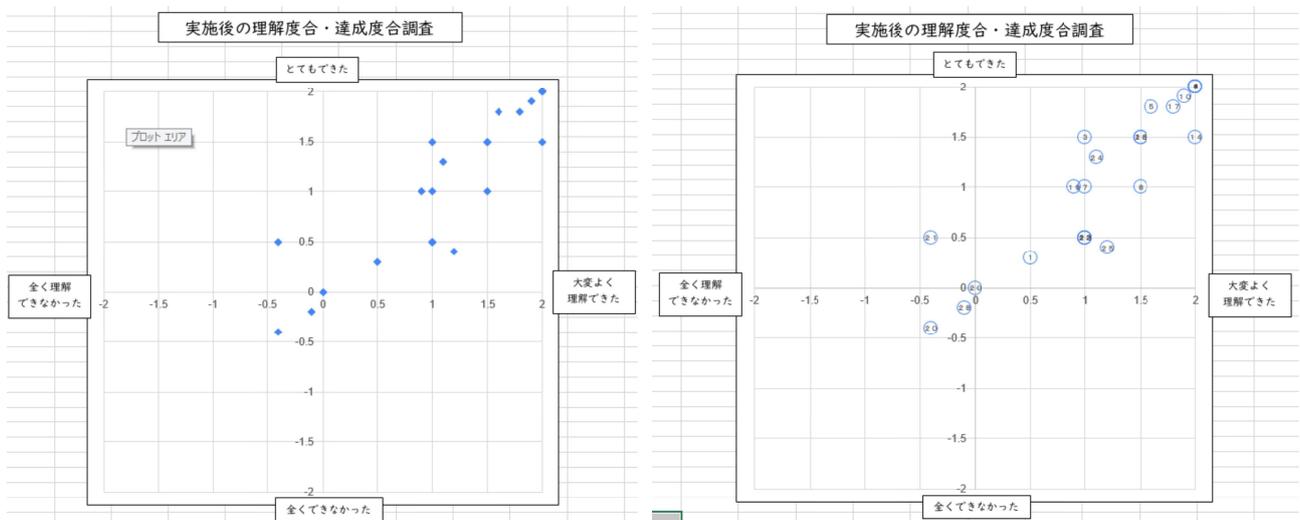
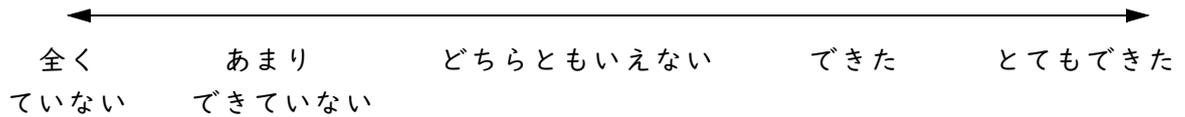
項目1：理解の度合調査

〇〇の単元の学習内容の理解度はどのような状況ですか？

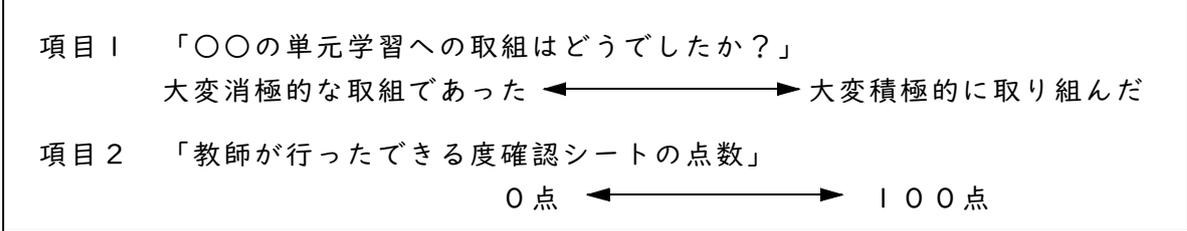


項目2：実績の手応えの調査

〇〇の単元の学習の達成度（できる・できない）はどのくらいですか？



この教科では、「丁寧なわかる授業」とともに「わかるからできるに生徒がアップデートできる仕掛け・取組」に重点をおいて単元の指導を行った。その指導のアセスメントのために、生徒自身によるアセスメントではあるが上記2項目での調査をした。アセスメントの調査例でも示したが、「学習への取組度合」を調査したり、「教師の方で入力する確認シート等の点数」などでクロス分析をすることもできる。



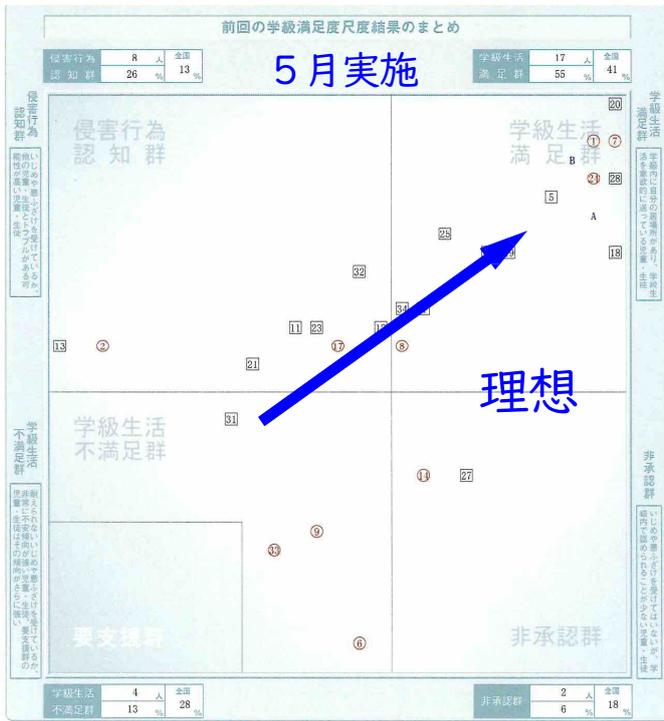
重要なことは、このアセスメントを、自分が行ってきた指導に対して教師自らがアセスメントをする視点を持ち、その後の授業改善に生かす強い決意をもてるかである。そうでなければ、この調査は何の意味ももたないのである。

※ ここで活用した生徒調査の座標化については、生徒用タブレット端末を用いて簡単に座標化までもっていくことができる。この学級内の個々の生徒の状況を視覚的に捉えるメソッドである【オンラインを活用したアナログな意識調査のメソッド（汎用的な実用ツール化）】  
© “Online awareness Survey of Analog” Method - UTILITY」については、最後に概要を示す。

4 マクロ的アセスメントとミクロ的アセスメントの活用成果

どのようにアセスメントを活用したかについては、紹介してきたX組を例に述べる。

X組では、学級開きを経て学級組織を決定して、hyper-QU調査を5月に実施。5月中旬以降の運動会の練習が本格化するその直前に実施した。(マクロ的アセスメントの実施)



図中の方向に多くの生徒が集まっていることを理想と考えてしまうが、その必要はない。まずは学年全体で現状を分析し合い、これが想定範囲であるか、新たにケアをしなければいけない状況があるかを、学年会において、受け持ちの授業での様子を含めて話し合うことが大切である。実際にそれを行い、特に「学校生活満足群」以外に属する生徒一人一人については、丁寧に状況把握に努めた。

その結果を受けて行った手だては、まさに研究の仮説「一人一人が物事を自分のこととして捉え、みんなで力や知恵を出し合い乗り越えていく活動の経験が豊かな自治的活動となる。」である。ここに活路を見いだして、これを具体化して進めた。

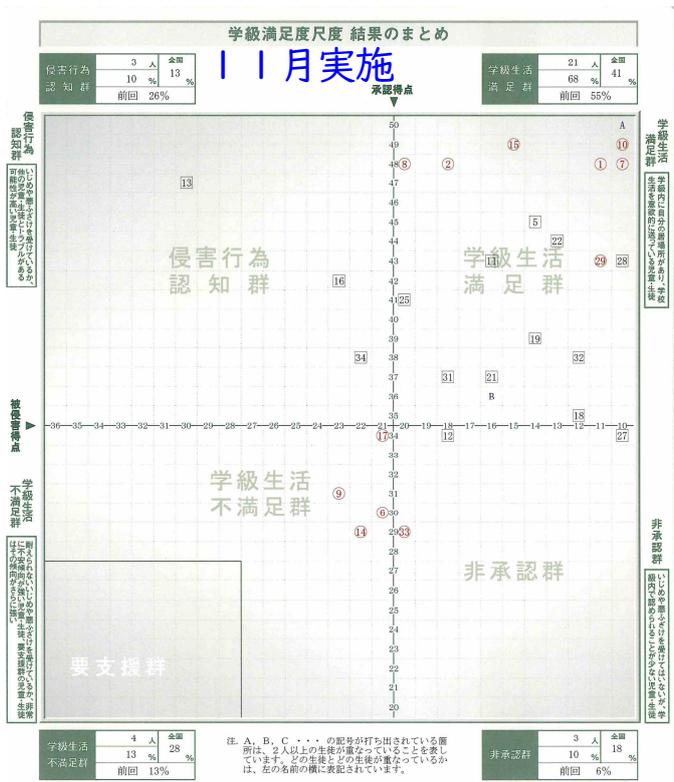
そして、hyper-QU調査を11月の合唱コンクール後に行った結果が左図である。

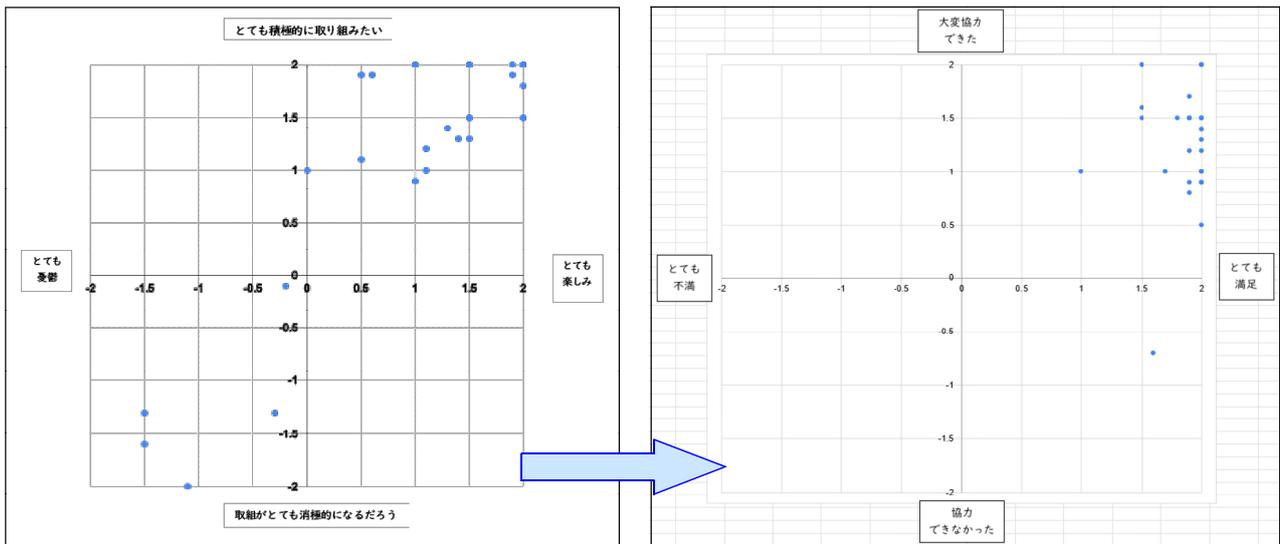
注目した点は、全ての生徒が右よりに移動したことである。横軸は「被侵害得点」。被侵害得点とは「友達に嫌なことをされると感じている」の度合であると書かれている。また別解釈で、右方向に行くほどクラスの決まりが守れる・ルール確立の度合を表すとも書かれている。では、右に行けば行くほど良いのか。一概にはそうはいえない。学級で言うならば、徹底するための強い権限が働いているという見方もできる。左方向へのばらつきは、「ルールの見直しなどの意見が自由闊達にできる要素がある」とみるとこともできるはずである。

一方、縦軸は「先生や子どもたちに認められている」の度合である。議論があれば、一時的に「自分は受け入れられていない」と感じることもある。そう考えると上半分の領域に入っているという結果であれば良

いではなかろうか。

さらに、X組では、10月の合唱コンクール活動開始直前と11月の合唱コンクール直後(hyper-QU調査11月の前)のミクロ的アセスメントとして、セルフアセスメント調査を実施した。前述の通りであるが、X組での結果は次の通りである。





さて、この結果をどのようにアセスメントをするか。このような結果となった背景や要因は何か。特別活動等の研究チームの報告で述べた取組「計画委員会を基にした学級活動」が軌道に乗ってきたのがこの頃である。これがよい影響を与えたと分析している。

この自治的活動の経験が、「hyper-Q U調査 11月」に繋がったと分析している。

では、全ての学級が同様の結果となったのかということ、合唱コンクールにおけるミクロ的アセスメントの結果はほぼ同様であったが、「hyper-Q U調査 11月」の結果が全て同様になったわけではない。hyper-Q U調査における「学級生活満足群」については、全9学級の全てが全国平均をかなり上回っているが、X組と同様な傾向となっているのは3学級である。されど、この3学級以外で、その後の生徒たちによる創作活動「ダンス発表会」で優秀な成果を収めている学級もある。つまりhyper-Q U調査は、あくまでも大きくくりなアセスメント資料と捉え、その結果が「成果」なのか「成熟の過程」と捉えるのかは実際に指導にあっている教師の目が重要なのである。

## 5 マクロ的アセスメントとミクロ的アセスメントの活用の課題

特別活動における活用に比べて、教科についての活用は具体的な結論を得ることができていない。先述の通り、教科におけるミクロ的アセスメントの調査項目（観点）等の候補を立ち上げ、情意面での分析は一部分の教科で実践したが、具体的な手だての構築までとなっている。「わかる」から「できる」への指導の仕掛けの定着や「情意面」と「実績面」のアセスメントには至っていない。これが課題である。

## 6 アセスメントの研究を通して

本校のアセスメントは、「生徒の主体的な取組を促すための仕掛けに活用する」という視点で研究を進めてきた。ミクロ的な視点で捉えるならば、「教科の次の単元での指導の改善」や「生徒への働きかけ・仕掛けの工夫につなげる」ためのアセスメントである。

そもそもアセスメントは何のために行うのか。状況を的確に捉え、よりよい形につなげていくための取組をするためである。様々な指導において、意図的・計画的な指導を行っていくのであれば、現状分析をした上での指導計画や仕掛けの考案を行い、その取組後の分析を次なる指導に活かす視点をこれからも大事にしたい。

さらに、今回のクロス分析の手法は、アセスメントの様々な手法のほんの一例に過ぎないが、紹介をするタブレット端末等をはじめとするICT機器の有効活用は、私たち教師の指導スキルの引き出しに収めておきたい手法と考えている。

★オンラインを活用したアナログな意識調査のメソッド（汎用的な実用ツール化）

© “Online awareness Survey of Analog” Method - UTILITY

従来より意識調査の多くは選択肢が4択・5択の形で、次のような一元的調査になっている。  
 例えば、東京都「学びに向かう力等に関する意識調査」は資料1のような形で、4つの選択肢から選択するようになっている。

そして、それぞれの選択肢の割合を資料2のように分析している。これを同じように、いくつかの項目で行い、一元的分析を行っている。タブレット端末を用いてデータを集約しているが、そのデータは4択または5択のように、自分の意識等を指定された選択肢に当てはめるとい形にせざるをえない。

したがって、クロス分析も資料3のような「クロス分析」を展開することになる。各調査項目に「肯定的」または「否定的」な回答をした生徒のうち、と書いてあるように一つの項目（観点）における分類を2つに絞り、もう一つの項目を「分かることやできることが楽しいから」や「しっかり考えられるようになりたいから」などの多岐にわたる分類に対する分析となっている。調査報告を資料としてまとめる場合は、このような形をとるが、日々の授業や学級集団の状況分析には適さないことがある。

(1)	国語の授業の内容はどのくらい分かりますか。
	(選択肢) よく分かる/どちらかといえば分かる/どちらかといえば分からない/ほとんど分からない

資料1 東京都「学びに向かう力等に関する意識調査」より抜粋

(1) 【中学校】国語の授業の内容はどのくらい分かりますか。

学年	各回答を選択した生徒数(人)	各回答を選択した生徒の割合(%)									
		4	3	2	1	0					
第1学年	令和5年度	27,961	36,323	5,330	934		39.6	51.5	7.6	1.3	
	令和4年度	27,717	36,961	5,902	905		38.8	51.7	8.5	1.3	
	令和3年度	27,061	36,795	6,221	909		38.1	51.8	8.8	1.3	
第2学年	令和5年度	24,055	37,278	6,706	1,387		34.6	53.7	9.7	2.0	
	令和4年度	24,520	37,818	6,732	1,208		34.9	53.8	9.6	1.7	
	令和3年度	25,161	36,290	7,198	1,277		36.0	51.9	10.3	1.8	
第3学年	令和5年度	25,432	36,805	6,347	1,268		36.4	52.7	9.1	1.8	
	令和4年度	26,306	36,441	6,412	1,122		37.4	51.9	9.1	1.6	
	令和3年度	28,579	33,039	6,197	1,259		41.4	47.8	9.0	1.8	

回答 4→よく分かる 3→どちらかといえば分かる 2→どちらかといえば分からない 1→ほとんど分からない

資料2 東京都「学びに向かう力等に関する意識調査」より抜粋

第4章 主な調査項目間のクロス分析

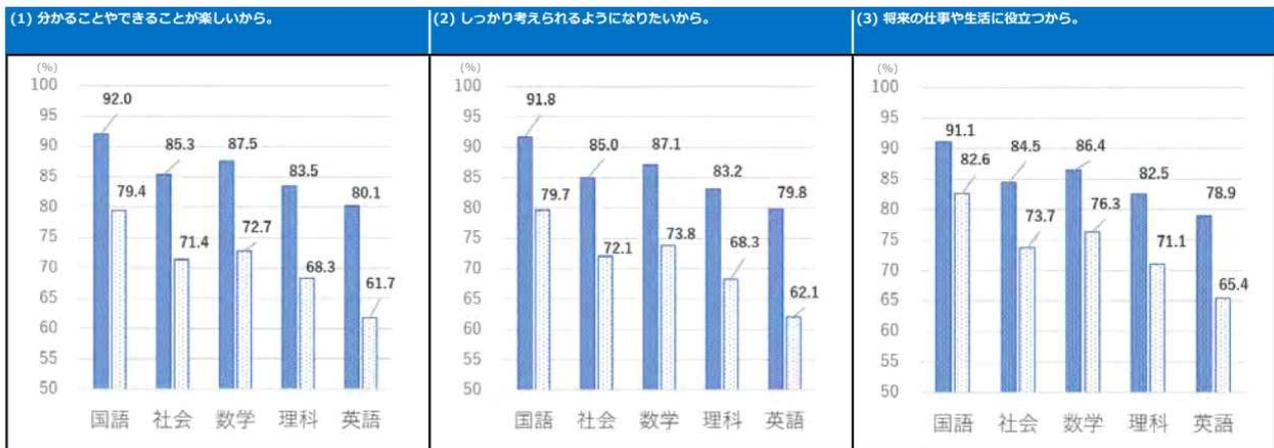
資料3 東京都「学びに向かう力等に関する意識調査」より抜粋

1 児童・生徒調査「3 学習の動機」と児童・生徒調査「1 各教科の授業の内容に対する理解の程度」との関係

児童・生徒調査「3 学習の動機」の各調査項目に肯定的又は否定的な回答をした児童・生徒のうち、「1 各教科の授業の内容に対する理解の程度」に肯定的な回答をした児童・生徒の割合

- 「3 学習の動機」の調査項目に肯定的な回答をした児童・生徒のうち、「1 各教科の授業の内容に対する理解の程度」の調査項目に肯定的な回答をした児童・生徒の割合
- 「3 学習の動機」の調査項目に否定的な回答をした児童・生徒のうち、「1 各教科の授業の内容に対する理解の程度」の調査項目に肯定的な回答をした児童・生徒の割合

【中学校】



そこで、日々の授業や学級集団の状況分析に反映しやすい意識調査のメソッドを開発した。  
この分析の方法について次の3つの点に着目をした。

① 選択肢を吟味しやすい指標として捉え、自らの微妙な状況を自分で決定させる。

【キーワード】デジタルではなく、アナログ的な調査

② 関連性を知りたい2つの項目(観点)のそれぞれの単元的調査結果とクロス分析ができ、かつ視覚的に全体像を知ることができるように座標化する。さらに、個人個人の時間的変容も座標化から見とれるようにする。

【キーワード】単元的調査結果(表・棒グラフ)からクロス集計の座標化

③ 項目(観点)や指標を状況に応じて簡単に設定ができ、そしてタブレット端末等を活用した個人データの集約後直ちに、全容を座標平面上で見取ることができる。

【キーワード】汎用性のある実用ツール化

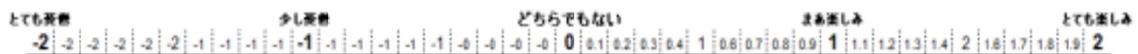
【メソッドの概要】合唱コンクールに向けての学級活動に対する事前の状況把握を例にして

<教師の準備>項目(観点)と指標を数直線上に設定する。(生徒タブレット上に設定)

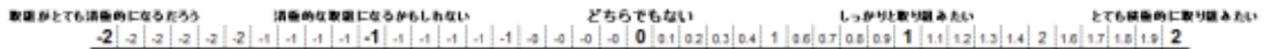
<生徒の作業>生徒は、自分の状況を数直線上にタップする。

(5択を更に細分化し、アナログ的な決定ができるようにしている。)

項目例1:合唱コンクールを前にして、今の気持ちの状況はどうですか?

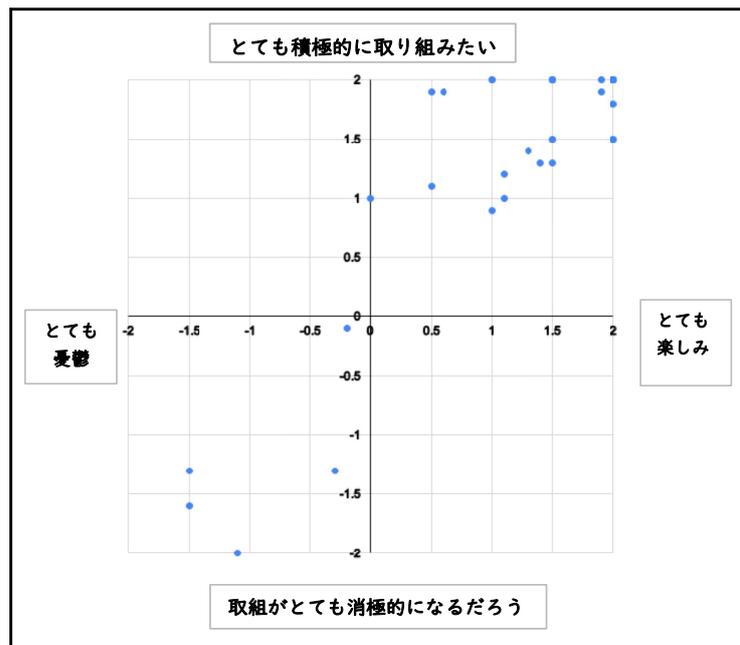


項目例2:合唱コンクールに向けての学級の取組に対するあなたの取組はどのような姿になるとおもいますか。



タップした生徒情報は自動的にエクセルデータで集計され、座標平面上にクロス分析される。

学級	番号	項目1	項目2
2A	33	1.5	1.5
2A	6	-0.2	-0.1
2A	10	1	2
2A	16	1.3	1.4
2A	8	2	2
2A	22	1.1	1
2A	31	-1.5	-1.3
2A	13	1.5	2
2A	32	1.4	1.3
2A	9	2	1.5
2A	17	1.9	1.9
2A	23	1.1	1.2
.	.	.	.
.	.	.	.
2A	11	0	1
2A	5	0.5	1.1



座標平面上の点には番号を付けることもできる。  
合唱コンクール前の学級の生徒の状況が分析できる。